

## ニゴロブナ稚魚から未成魚における減耗要因の検討

磯田能年・根本守仁・片岡佳孝・寺井章人

### 1. 目的

近年、ニゴロブナ稚魚期以降(6月以降)の生残率が低下している。これまでの研究により、稚魚期以降の生残率と北湖におけるオオクチバス0歳魚の秋季生息尾数との間には負の相関関係があることが分かっている。このことから、今年度はオオクチバスによる影響を中心に減耗要因を検討した。

### 2. 方法

調査は、2022年6~11月にかけて長浜市延勝寺地先の天然ヨシ帯周辺および近江八幡市牧地先の造成ヨシ帯周辺において実施した。ニゴロブナ0歳魚の採集には、湖岸(水深1m未満)において張網(小型定置網)(6~11月)と、やや沖合(水深1~2m)において電気ショックカーボート(8~11月)を用いた。オオクチバスの採集は張網を用いた。

### 3. 結果

ニゴロブナ0歳魚の平均体長は、延勝寺において9月29日時点で56mm、牧において10月26日時点で58mmであった。昨年度の延勝寺では10月19日時点で80mmであり、今年度は両地点とも小型であった。

張網で採捕されたオオクチバスの胃内容物は、消化が進んでおり種まで同定は不可能であったが、7~8月にかけて両地点で採捕された体長50~100mmの個体(90尾)のうち21%(20尾)がコイ科魚類を捕食していた(図)。

延勝寺の7~8月の張網採捕魚のコイ科魚類の組成は、個体数でニゴロブナ稚魚が30~52%、カネヒラが31~64%であり、捕食されていたコイ科魚類はこの両種である可能性が高い(表)。このことから、7~8月にかけてのオオクチバスによる被食がニゴロブナ減耗要

因の一つである可能性がある。

延勝寺における9月の電気ショックカーボートによるニゴロブナ0歳魚の1時間当たりの採捕尾数は、2021年が60.9~176.6尾、2022年が8.6~11.8尾であった。2022年のニゴロブナは低成長であったことがオオクチバスによる被食の影響を大きくし、8月までの減耗が高まった可能性が考えられる。

オオクチバスが減耗の一因であることが示唆されたが、環境要因などその他の要因についても検討する必要がある。次年度以降は種苗放流等を組み合わせて、稚魚期以降の減耗要因を明らかにしていく。

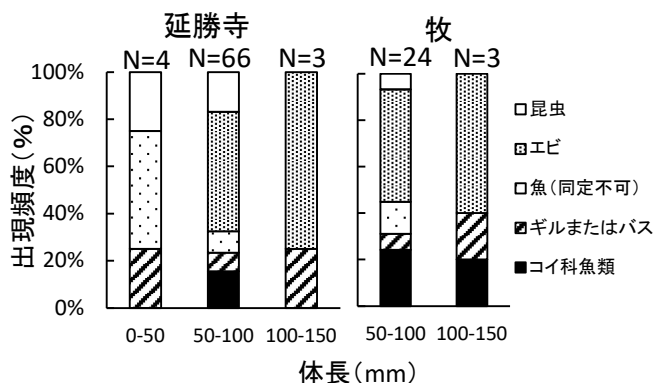


図 オオクチバスの胃内容物組成

表 延勝寺張網で採捕されたコイ科魚類

	7月14日	7月28日	8月9日	8月25日
ニゴロブナ	78	32	32	15
ゲンゴロウブナ	2		1	1
ギンブナ			1	1
コイ	8	2	4	7
カネヒラ	82	22	69	11
ビワヒガイ	6	3		
モツゴ	1	2		
合計	177	61	107	35